韓国の国会議長、鄭義和氏が5月16日、中央大学多摩キャンパスの特別講演で演壇に立った。演題は「韓日関係、義を以って和を成す」。韓国語で行われたため、聴講者は同時通訳のイヤホンを付けた。

記念碑「白門無窮之碑」を感慨深そうに見る鄭氏。1990年４月に建立された＝多摩キャンパス

父は中大 OB

まだ身近と思われる衆院・参院議長の講演ですら聴いたことがないのに、韓国国会議長の特別講演は衝撃的だった。中大生に貴重な機会をもたらしてくれたのは鄭氏の父である。中大法学部を1943年に卒業したＯＢというので、聴講者は一様に驚いた。

鄭氏の来日目的は、翌17日から始まる日韓国会議員による初の試み、「日韓議会未来対話」の開催だ。公務多忙のなか、中大特別講演は多くの関係者の尽力により実現した。

講演会場には中大で100人以上が学ぶ韓国人を含む約300人が集まった。

鄭氏の国会議長任期は５月末まで。日本は議長就任後、初の訪問国であり、任期終了前最後の訪問国でもある。日本を重要視する姿勢が伝わってきた。

韓国国会議長 鄭義和（チョンウィファ）氏 特別講演リポート

真の繁栄と文明の時代を

以下は講演の概要である。

日本と韓国は北東アジアのみならず、全世界の繁栄と発展を担う国だと位置づけている。

両国の間には日本の江戸時代、日韓を往来した朝鮮通信使が200年以上にわたって交流した歴史がある。

両国とも第二次世界大戦後の数十年の間に大きな成長を遂げた。日韓が短期間で繁栄した理由として、「善隣と平和の力」「両国政府の意志と戦略」「国民の渾身の努力」などを挙げた。

今後は「義を以って和を成す」ことがポイントになると強調した。

義とは、人として守るべき正しい道。

和とは、互いに相手を大切にし、協力し合う関係にあることだ。

鄭氏は２年前の来日時、安倍首相と会談した折り、首相は、日本は和の国ですと表現したという。

これからの時代は、改めて文明の時代だと鄭氏は語る。学生による新しい朝鮮通信使など発展への潜在力はまだまだある。互いに友人、パートナーとして真の繁栄と文明の時代をつくり、助け合い、協力し合うべきだという。そして、文明の花を咲かせようと語気を強めた。

質疑応答では学生３人から質問が出た。鄭氏は次の公務までの時間いっぱいまで、丁寧に答えていた。

満員の聴講者

◆聴講取材を終えて

和を実現する方法論は一人ひとりの中にある。

学生記者
髙瀬杏菜（法学部４年）

「義を以って和を成す」―なんと難しい演題だ。まるで高校の漢文の授業にタイムスリップした気分だ。会場の８号館教室で鄭氏を待つ間、同時通訳機を受け取る。こちらはまるで各国首脳が集まる会議サミットのようで、これからすごい人が話をするのだと胸を高鳴らせる。

講演後、質疑応答の時間が設けられた。私は、思い切って聞いてみた。「ここにいる大学生にしてほしいことは何ですか」

鄭氏は物質中心の思考ではなく、利他的になることを挙げた。物質だけでは人間を幸せにはできず、利他的であること、他人を思う心こそが、人間らしい暮らしなのだという。

精神面では、人生の価値について真剣に考え、悩むことだと話した。家庭がその細胞である。家庭の重要性を改めて考える必要があるように思う、と答えた。

われわれ学生は大学生活で大きな試練にさらされる。就職という壁だ。しかし、この試練をきっかけに、人生の価値という途方もない課題について考えてみるのもいいかもしれないと思った。

また、和を実現する方法論は学生一人ひとりが考えなければならないと教えられた。一口に和と言っても、ハーモニー、調和、平和、和合など和の価値はたくさんありそうだ。

日本語の難しいところでもあるが、自分の考えによって初めて和がなされることを知った。

難しいと思ったこの日の演題も、なんとなく理解できた気がした。自分なりの和を考えることが、義を以って和を成す第一歩なのだと実感した。

～「和」がつく言葉～

調和　平和　和平　和解　温和　唱和　緩和
日和　和悦　和気　和協　和議　和敬　和易
和好　和合　和順　和親　和衷　和睦…